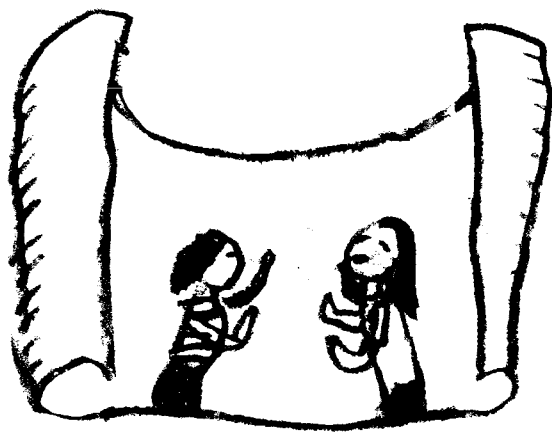


二十四歳の友情

森村桂

の友情

森村 桂



文藝春秋

二十四歳の友情

1971年2月25日 第1刷

定価 550円

1973年8月15日 第6刷

著者 森 村 桂

発行者 檜 原 雅 春

発行所 株式会社 文 藝 春 秋

東京都千代田区紀尾井町3 郵便番号 102

電話・東京 (03) 265-1211 (大代表)

印刷 図書印刷

製本 加藤製本

© 1971 Katsura Morimura

Printed in Japan

万一落丁乱丁の際にはお取替いたします

0093-301821-7384

目次

一、最後のチャンス	5
二、森と小川に囲まれた丘	29
三、三間と三十八間の土地	55
四、火薬庫を背負ってね	75
五、三代続いた美紗さんの病氣	93
六、テキさまも相当なもの	117
七、「パンティは月に一ぺん洗うの」	127
八、銀行ってお金貸さないんですか	147
九、「さあ、これが手付けです」	161
十、運がこっちに歩いて来た	179
十一、さらば土地よわが夢よ	197
十二、リサイタルを開く美紗さん	213
十三、私は資本家	227
十四、病氣を知った美紗さん	243
十五、土地、この不可思議なるもの	257

二十四歳の友情

装幀 長尾みのる

一 最後のチャンス

「ねえ、トンも買わない。この辺、一坪四千円ですって」

ピアノを弾くために八王子の田舎に下宿している、友だちの上原美紗さんを訪ねて帰ろうとした時、思いついたように美紗さんがいった。

「四千円？」

トンは思わず声をあげた。土地と聞くと彼女は弱い、ちょうど貯金は四十万円、高校を出て六年、嫁さんに行くためにせつせと広告会社で働いて貯めたお金だ。二十四歳になった今年は、会

社まで辞めて、花嫁修業、ひたすら、現れるべき人を待っているというのに、幸か不幸かその人は現れず、いまだに四十万円は健在なのだ。

トンこと、杉山俊子は美紗さんと違って、残念ながら、美人ではない。その上、女の子にしては、ちょっとばかりノッポである。といっても、べつに、結婚して住む家に困るというほどではない。身長一メートル六十四センチ、ただ、今までの三つから五つ年上ぐらいの男性どもが、戦中戦後の食糧事情の悪い時に育ってくれたから、一九六四年の現在としては、まだ、候補者が、ちょっと美人の方に片よって行っちゃうだけで、おいおい若い男性が育ってくるのを信じて、何とか焦りを顔に出さず、べつとりタヌキ化粧に資本をかけることもなく、髪を小さい時のアダ名、うさぎのトン助をつくりそのままに、二つにギュッと束ねて、バタバタ走りまわっては、誰かひっかからんかと思っているのだが、どうも最近の男は目がないのだ。

さあて、新宿から八王子まで電車で五十五分乗って、またバスで三十五分、その道もかなり揺れることは揺れるけど、緑の山々に囲まれたこの深沢が四千元、安いんだろうか。高いんだろうか……。

「今もう東京都でこんな安いとこないんですって。母も買うっていつてるのよ。新宿には電車で一本だし」

「住むの？」

「ううん、投資よ、上ることは目に見えてるし、一月とたたないうちに、パツと上っちゃうんですって」

「でも、ちょっと遠いわね」

「鉄道がひけるって噂があるのよ」

「鉄道とは古風な。まるで西部劇だ。」

「でも噂でしょ」

「押える押える、亢奮しない。」

「高速道路が代々木まで行くんですって。これももう工事始めてるって」

「買うわ、私も買う」

「ああ、もうだめだ。私に土地の話をしちゃいかんのだ。」

「ねえ、誰に頼んだらいいの」

「おじさんよ、あらどこいっちゃったかしら」

中肉中背でスタイルがよく、抜けるように色の白い、長くたらし髪は赤っぽくて、ちょっと外人のような顔立ちの美紗さんは、特徴のあるちょっと眩まぶしそうな、そのくせキラキラ光る目で縁側に出て中村氏をさがす。いない。さては養豚所の方かな。縁側を下りようとすると、隣の障子のガラス越しに寝たっきりのおばあさんがこっちを見る。

「ドサン、ドサン、ドサン」

バラック建てのこの家に、一間だけ付け足した感じの六帖の洋間の応接間の窓の下で、シャツにバジヤマのズボンをはいたおじいさんが丸椅子に坐って、何やらひとりで叫びながら、右腕を動かしている。

「このおじいさん、昔、陸軍の偉い人だったんですって。今、戦場で指揮してるとこのよ」

美紗さんが説明してくれる。ここのおじいさんが豚を飼う片手間に、頭の病気の人のアフターケアしてゐるっていうんだけど、どうしてまあ、よりによって、美紗さんこんなところに。

「こんなところで、気味悪くないの」

「うん、大丈夫よ。べつに危害加えるような人たちじゃないから」

ピアノ弾いたり作曲してたりだけでなく、見た目にもお嬢さんで繊細で神経質なはずの人なのに、美紗さん、意外と遅い。

「ピアノの音ってうるさいでしょ。どこの下宿も断られて。ここなら、誰もうるさいっていう人いないから」

豚小屋に降りながら、美紗さんは説明してくれる。そうか、せっかく都内にいい家があっても、美紗さんのように、朝から晩までピアノを弾かなくてはならないとなると大変だ。その上彼女は、お嬢さま学校であるそのミッシェンスクールを大学まで出ちゃってから、急に、昔から習ってた

ピアノの道に進もうと決心したというから、人一倍努力しなければならないのだ。

だけどやっぱり、この障子一枚であとは縁側で続いているあの六帖間で、美紗さん、夜中なんか気味悪くならないだろうか。何でも全部で四人いるって話だけど。

「おじさーん、おじさーん」

美紗さんはソプラノだったりアルトだったり、声量のある声で呼びまくる。早く現れて頂戴よ、おじさん。さもないと四時のバスに乗り遅れる。あとは六時なんだ。それにしても豚小屋というものはかくも臭いものか。はあて裏の畑かそれとも、向うの山の上か……、嫌だねえ、人のいる前でうんちして。

あつちをキョロキョロこつちをキョロキョロするんだけど、あの大きな豚よりも太った黒々としたおじさん、どこにもいない。モンペをはいて割烹着をつけたおばさんが井戸でキャベツをきざんでる。そばには青い格子の半袖シャツを着た何ともうつろな目の青年が、ぼんやり突っ立っている。背も私よか高いし、年の頃だって悪くないのに、クルクルバーじゃ、やっぱり候補にはねえ。

「おばさんに聞いてみるわ」

美紗さんは井戸に走っていく。

「変だねえ、おじさん、畑にいるはずだけんど」

とか、

「でもちゃんとした話じゃないと困るよ」

とかなんとかいう声が、井戸の水ととぎれとぎれに聞えてくる。トンのワクワクはもう最高潮、ああ、バスは行っちゃった。よしこうなったら落着こう。大事の前の小事。

「あのね、ちゃんとした話じゃないと困るんですって」

美紗さんはトンに聞えてた通りのことを一生懸命説明してくれる。

「それからね、土地さがしてるってこと、あまり大きな声でいっちゃいけないって。この辺の人はとても土地に対して敏感になってるから」

そして美紗さんはいう。

「あることはあるらしいんだけど、うっかり頼んで断ったりすると、おじさんの信用にかかわるんですって。地主の人に無理いっちゃうでしょ。それにおじさん、ここに越して来たばかりだから、まだよそ者でしょ、信用が大事なんだって。不動産屋と違っておじさんが儲けるわけじゃないでしょ。そこんところがドライにいかないんだって」

「うん、大丈夫よ。大丈夫。百坪は確実に買えるんだから。私の貯金で」

「トンの貯金で」

美紗さんがびっくりして、何とも尊敬のまなこでトンを見つめる。

「エヘ、まあね」

トンはちよつと自慢げに低い鼻を高くする。百坪の土地が自分の貯金で買えるなんて、なんていい気持。もつとも帰つてオフクロさまに相談しなけりやならないけど。でも何より問題は受入れ態勢だ。

「わしんことさがしてたつて？」

ひょっこり中村氏が戻つて来た。デレデレに汚れたワイシャツの袖をまくりあげ、おなかには小山のようになり盛上つて。どうしてこうブーちゃんと似てるんだらう。なんてもういっちゃいかん、今からは大事な大事なものになるんだから。

「あの、百坪なんて大丈夫でしょうか」

トンは恐る恐る切り出す。だって、こんな広大な山川のところで、たったの百坪だなんて。

「百坪ねえ、ありますよ」

「あの、高台で、井戸の掘りやすいところ」

すぐ図に乗っちゃうタチなんだ。しかしおじさん、

「高台で井戸の掘りやすいとこねえ。うーん、あるにやあるんだが」

「そうですか。あの、ぜひお願いします。ほんとに、こんな空気がよくて緑のあるとこ、ええ、お宅に近ければ何より安心ですし」

おじさんのドテツとした顔が、一時デデデツとゆるんだ。どうして私ってこう調子いいんだろう。トンは内心にやりとして、もう一つ、

「あの、それで、あの、豚小屋の近くでないところ」

さて、帰りのバスに揺られてほこりを一杯かぶりながら、トンはだんだんさめて来た。何しろたっぷり三十五分は乗るのだ。しかも、何とも揺れること。このほこりよ。そして、駅から新宿までは一時間近く。あんな山の中に建てたって、将来暮らせるだろうか。電車だの高速道路だのが出来なかった場合はどうなるのだろうか。

断ろう。そんなとこ持ってたって住めもしなければ売れもしなかったらどうにもならない。そうとも結婚するにしたって、ずっと勤めているにしたって、会社まで一時間半も二時間もかかったら通いきれない。それが、四千円なんて高いかも知れない。トンはだんだんそんな気持ちになっていった。

「お帰りなさい。美紗さんどこ、どんなとこだった」

新宿区戸塚のわが家に戻ると、オフクロさまが精進揚げを揚げながらふり返る。

「駅から三十五分もバスに乗るの。山に囲まれててね。川もある。もう全部緑よ。こんなところはぜんぜん違う。ほら」

田舎なんだと、トンは摘んで来たあざみを出すと、

「あら、いい色のあざみね。濃くて」

着がえに行こうとして、ちよっといたずらっけを起してトンはいった。

「そこんとこ、百坪ばかり、私のお金で買う約束して来た」

「そう、いくら」

トンは思わず足をとめた。オフクロさま、まさかとも冗談でしょともいわない。トンは努めて無表情に、

「四十万円」

「そう、四十万円ね」

オフクロさま、驚いていない。トンの方がびっくりしてオフクロさまの横顔を見つめる。なんだかこっちの方があわててくるよ。よし、もう一度試そうか。着がえながら、ごく当り前の調子でトンはどなる。

「お母さん、買ってもいいんでしょ」

「そうね、そんないいところなら」

トンの心臓がドデドデドッテーンと鳴った。買ってもいい、オフクロさまが、買ってもいいといってくれる。土地を買っていいというのだ。ああ、百坪、私の土地が出来る。トンの身体の中

を激しいものが逆流した。ああ、もしかしたら、これが最後のチャンスかもしれない。あんなに欲しかった土地。この年々の値上りで、ついに夢と化してしまった土地。それが、再びよみがえろうとしているのだ。トンにはや狂おしいほどだった。

トンが高校三年の春、といえば今からもう七年前だ。確か昭和三十二年だったろう。まだ生きていたオヤジさまのところに、その頃、軽井沢の土地分譲のパンフレットがさかんに来ていた。どれも一坪五百円だった。東京郊外の土地はどれも値上りして何千円かして、どんどん値上りの真っ最中だった。それを知りながら、トンは毎年心ばかりあせて育っていた。

トンのオフクロさまの父親は大地主で、大震災の時、このあたり戸塚の土地一帯を買占めて、当然オフクロさまにもその一部が残されたはずなのに、戦争のどさくさで、印を預かっていたオフクロさまの腹違いの兄に土地をすべて奪われ、残ったのはタクシー会社の隣のこのわずか四十坪の土地がすべてという有様で、それについて、ただひたすら研究ばかりしている独文学の教授であるオヤジさんは、一言も文句をいわず、取られるにまかせてしまったのを、トンは口惜しく思いながら育ったのだ。そりゃあそうじゃないか。たとえ後妻の娘とはいえ、オフクロさまにも当然分け前があるはずだし、そのみならず、女学校には、この家のある土地から通ったくせに、その二百五十坪あったところを、うまいこといってはどんどん削ってよそに売られ、あげくの果